

高校のマスコミ教育

— マスコミ教育覚書 (2) —

荒牧富美江

短大生を対象に行なったマスコミについての意識調査の結果から、高校のマスコミ教育に疑問をもつようになったことを前号で述べたが、短大でのマスコミ教育を考える者として、その後いくつかの点について、調査してみた。

マス・メディアを使つての視聴覚教育は、確かにこの二〇年ほどの間に目ざましい発達をとげたようである。テレビが一般家庭に広く普及したように、小・中学校の授業がテレビ・ラジオその他の機器を利用して行なわれることは、もはや珍らしいことではない。

しかし、これだけ身近なものとなつたマス・コミュニケーションそのものについての学習の機会は少なく、そのメカニズムについて考えさせようともしないのはどうしたことであらうか。一般の学生たちにとっては、せい

ぜい小・中学校時代の新聞社やテレビ局の見学、高校の国語や倫理・社会の教科書のわずかなページが、マスコミ観を形造るよすがとなつてにすぎない。この現状からすれば、学生たちがマスコミに対して無防備なのを責めることはできないであらう。

ただ高校の専門教育を主とする学科、たとえば商業科では、学習指導要領にいう「生徒の学習意欲の高い実験・実習のような、体験を通して学びとらせる科目を多くするなどの配慮」にしたがって、「商業」「広告」などの科目のなかで、広告の制作や広告の効果の測定などを具体的にとりあげている学校（富山・福光高）がある。また「商業一般」のなかの「広告」「通信」などの科目で、市場調査や、新聞の経済記事の比較研究を行なっている学校（都・五商）、秘書科の「商業一般」

で、その日の新聞を教材にする学校などがあることを知った。しかしこれらも、担当する教師のその年の授業計画にまかされている面が多いともいわれている。

こうしたカリキュラムの不十分な点を補うような形で登場してくるのが、クラブ活動のなかの「新聞部」や「放送部」である。

ここでは「放送部」の現状について少しふれてみたい。

一般に中学・高校の放送部は、昼休みや放課後に、校内連絡や校内ニュース、短い自主制作番組や音楽などを流したり、あるいは学校の行事、文化祭や体育祭（運動会）などの放送を担当している。放送が停まれば、学校の機能も一時的にストップしてしまうといわれるほど主要な役割を果たしている放送部もある。純粋なクラブ活動として、部員は希望者の入部制をとっているところもあれば、放送委員として各クラスから選出された部員で構成されている学校もある。おそらく新聞部をはじめ他の部活動も同じであらう。従来のクラブ活動は、あくまで教科外の活動であつて授業とは関係がないことになっている。

高校放送コンテンツ

各学校の放送部の調査をすすめていくと、高校の場合、積極的に、活発な部活動を続けている放送部のひとつの目標となっているのが、放送コンテストであることがわかってきた。コンテストはいくつか行なわれているようだが、主として各校の目標となっているのは「NHK杯全国高校放送コンテスト」である。これは、NHK・全国高校放送教育研究会(全高放)・全国放送教育研究会連盟(全放連)が中心となり、昭和二十九年に第一回大会が開かれている。初めは関東地方の学校に絞られていたが、第四回からは全国の学校を対象に行なわれるようになった。

昭和五二年度の全国大会は二四回目に当たり、八月初旬、虎の門の国立教育会館で開かれた。予選にあたる各県大会の参加校は一、七〇五(五一年度一、六二九)、全国大会に推薦された学校は五六九(同五二三)校の多きを教えている。会のねらいは①「美しい日本語を大切にすることを育て、話す力、表現力を高める」②「校内マスコミの送り手としての自覚と創造性を育てる」ほか五項目があげられ、コンテストの各部門は、ラジオ・テレビの番組制作(TVカラー部門を加え、テーマ別に計五部門)・アナウンス・朗読の各部門

それに研究発表部門と多種多様である。

NHKでは「高校野球・高校総体など体育系のクラブの祭典に対し、文化系クラブのリーダーである放送クラブの二〇年余の歴史をもつコンテスト」とPRしているが、たしかに会場は、応援する参加校の生徒・関係者で満席の賑わいであった。甲子園の野球の雰囲気とは比べべくもないが、FMでの同時放送を採録しようと、最新のメカを操っている客席の部員たちの間に、一種異様な緊張感がみなぎっているのにはいささか驚かされた。

このコンクールでの入賞の経験も多く、本年度の審査員を務められた、富山県立福光高校放送部顧問の金井進氏に、クラブ活動の実態を伺うことができたので、その要約を次に紹介したい。

放送部活動とコンテスト

富山県の呉西(富山市西部呉羽山の西側)から砺波地区一帯は放送活動が非常に盛んで、私のところの校内放送では一〇分位の番組を定期的に週二本制作、放送しています。

部員の意識としては、高校生活の一つの楽しみとしてきているので、自分たちがミニコミの媒体をになって何かしようなどと大上段

にふりかぶった大義名分のようなものは持っていないと思います。そういう生徒たちに、顧問としていつもいうことは、①美しい日本語を身につける、②表現力をつける、③番組は総合芸術だから、視野広く、物ごとを多面的に捉えることができるようにする、④チーム・ワーク、それからこれはなかなかわかってもらえないのですが、⑤校内放送というひとつのメディアの発信元ですから、うっかりすると雑音発生機になりかねない。おしつけがましいものを流したら聴いてもらえないのだから、聴いてもらえる放送をいかに根気よく続けられるか、雑音発生機になるな、これは物の考え方の一つのベースとして部員に話しています。

番組制作部門のコンクール参加番組としては、校内放送したものの中で、好評だったもの、反響のあったものを、もう一度一か月半くらいかけて制作しなおします。コンクール参加作品には、御承知の通り、作品としてのパターンがあるので、そのポイントをいくつか指示します。たとえば①番組制作意図を具体化する一つの素材にも、その迫り方にいろいろあるわけですから、どの切り口でアプローチするかについて十分検討させるとか、②き

それが普遍化されていくプロセスとが、どこかで切れている。これからそれを埋めていかなければならないと思います。しかしなかなか埋まらないのではないのでしょうか。高校の三年間、最初の一年間は基礎練習、本腰を入れるのは一年半、あとは大学入試の準備という事で時間がないのです。ここで大学入試の方法が変われば、準備にさらに長い時間とられることになるのではないのでしょうか。

マスコミ教育とクラブ活動

これには、受け手としての教育と、送り手としての指導の双方を考えなければならぬわけですが、受け手としては、多面的に、大量にあふれている情報の中から、自分に必要である情報を、選択してキャッチし、自分の手もとに、引出し容易の形で蓄積する。この段階で、マスコミが提示した情報を吟味して、それがにせものか本ものか、そのフィルターのかかり具合などに眼をこらし、チェックできるような訓練を具体的にやらなければならぬと思います。送り手としての訓練では、収集、格納されている情報を一つのテーマに基づいて再構成していく。その間に不足

まとめあげていく。そしてそれを不特定多数によりよく理解してもらえようように表現する力をつけていく、ということになりましょうか。問題はこれをどこでやるかということですね。すでに幼稚園や小学校辺りでは、授業の中にとり入れられた視聴覚教育の観察結果の報告や研究が出ていますね。現在の高校生たちもそういう教育を受けて、テレビと一体となって育ってきた面がありますから、せっかく伸びてきた力、情報収集なり、応用なりの力を生かしていくことを考えなければならぬと思います。

生徒たちが強い関心をもつマスコミについて学習する時間が設けられれば一番いいのですが、現在の高校教育で、マスコミをカリキュラムの中にとり入れていくことは期待できないと思います。しかしこの情報処理のプロセスを具体化する教育は、教科科目の展開しだいで、いろんな場面が可能だと思わうんですね。ただ高校の先生は、授業のことは誰にも口出しさせないという、ひとつの王国みたいな風潮がありますから、そういう運動は非常に定着しにくいし、そういうものの方々に共感を得るだけでもたいへんな仕事だと思います。しかし始めているところもありますか

ら、研究と実践あるのみといえるかもしれない。昭和五七年度から学習指導要領が変わって授業時間数が減りますが、余った時間は、実際には大学入試の補習のための時間になる可能性が大ですけど、たとえばそういうフリーな時間を、カリキュラムには位置づけられなくても、マスコミの媒体をとりこみながら研究していくような時間にするのができたらいいと思います。

放送部の活動はいろいろな形でそれを手伝っていく。コンテストは、あくまでも部活動のほんの一部であって、コンテストが終ったら灯の消えたような部活動であってはならない。誰からも愛される放送部になつていかなければならないと思います。(文責在筆者)

アメリカの高校の「ジャーナリズム講座」における校内新聞の制作は、カリキュラムに組み込まれた授業である。教師の指導のもとに「新聞」というものを多角的にとらえ、企画・構成・記事のつくり方、一般新聞の比較研究、ラジオ・テレビと新聞の果たす役割などを学ぶ。そして全国から集まった高校生によって開かれる「全米学校新聞大会」では、高校の先生、大学教授、本職のジャーナ

リストも加わって、多くの分科会にわかれて、レクチャア、討論、実技指導などが行なわれるという。(「文芸論叢」13号参照)

クラブ活動である日本の高校の放送部ではいかにして「自主的」に番組を作らせるかに顧問は心をくたくたくという。顧問は指導者ではなく相談役である。そうした顧問を務められる放送教育担当の先生方の全国組織である「高放連」その他の会が、生徒とともに持つ会は、放送コンテストである。優劣を競うコンテストには発表の場はあるが、交流の場は乏しいにちがいない。数少ない機会なのにと残念に思われる。実際に、クラブ活動も一年の半分、夏休みのコンテストまでというような弊害も一部にあって、「それまでコンテストに重点がおかれすぎている反省をこめて」放送活動実践の報告や研究発表に力が注がれはじめた(校内放送研究②)というが、今年は、大会の一日を研究会会として、アナウンスや番組についての講座が開かれたという。こうした集まりでこそ、番組制作やその他の実際の過程において経験した、コミュニケーション活動のひとつの手段としての放送に関する疑問や考え方を、持ちより話し合うべきであろうと思う。そこでようやく放送部がマス(ミ

ディ)・コミュニケーションの機関としての役割りを果たすことになるであろうし、マスコミ教育の生まれる余地もあると思う。

金井氏も指摘されたように、現在の日本の高校教育のカリキュラムの中に、マスコミ教育を組み込むことはなかなか困難であろう。

受験に追われる時間的制約や、教師・生徒ともに、関心をもつ層とまたない層とのギャップ、教師側の授業に対する閉鎖性など、いろいろな問題が複雑に入り組んでいる。全高放の安藤会長も全高放ニュース(二二号)で、現在の高校教育の現場では、教科書中心、知識中心の教育活動が依然として続けられている。放送教育をすすめるうえで最も重要な課題の一つは、高校教育界の意識の問題であるといっている。

東京都では、教科外の教育活動に重点をおくひとつの試みとして、新しいクラブ活動をカリキュラムのなかで行なうことを定めた。

新しいクラブ活動は、全員参加、週一時間以上を原則として、それぞれの学校の特色を生かして実施することができるようになっている。昭和五〇年度がその完全実施年度であったが、東京都特別活動研究会の調査によれば①従来の部活動とは別に、新しいクラブ活

動を実施して全員参加させた学校(約四五%)
②全員参加のクラブ活動か、従来の部活動のいずれか、あるいは両方に参加させる学校(約三〇%)
③従来の部活動を拡大して全員参加させるようにした学校(約二五%)などがあった。その結果、クラブの種目は約二五〇種にもふえ、特色あるものとしてあげられているなかには、CM研究クラブなどがみえている。(東京都教育委員会年次報告「昭和50年度版参照」)

東京都のこの新しい試みが、必ずしもマスコミ教育と直接に結びつくとはいえないかもしれない。しかし、新しい自由な部活動の場が、金井氏のいわれる情報処理のプロセスを具体的に学習できる一つの機会に、もしなることができたとしたら、それはまた意義のあることであろう。

いづれにせよ、義務教育のなかの視聴覚教育の普及を考えると、高校教育の中のマスコミ教育をもう一段進めなければならぬ時期にきていると思うのである。